東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第４回

**◎支えている人／話し手：和田祐樹さん**

NPO法人ホールアース研究所 理事・ホールアース自然学校福島校 代表。一般社団法人成蹊-MICHINAS 代表理事。福島県出身。大学卒業後ホールアース自然学校へ。東日本大震災を契機に26歳で地元福島に戻り、翌年福島校を設立。郡山市湖南町に事務所を構え、子ども達や地域の抱える課題に共に取り組む。現在はALや探究、環境教育の分野で行政や大学、小中高校との連携事業や計画立案を行う他、自ら教壇にも立つ。2020年12月から母の運営する飲食店も経営する。

**◎ホールアース自然学校福島校**

立ち上げは2013年春。福島県内での自然体験活動・キャンプ・環境教育などを、主に郡山市を中心に活動、企画・協働を行っている。子どもの外遊びから大人の生涯教育まで、野外活動だけでなく地域振興・災害教育・防災教育・自然エネルギーなど”ひらめき””きっかけ”の場づくりをしている。

**今のこどもたちの姿**

震災から10年が経ち、当時生まれたこどもたちは今、小学校高学年になっています。震災当時は、あそびに出られない、外あそびというものもなかなかできない状況の中で、変化という意味ではものすごく如実でした。例えば3日間のキャンプの場合、震災前は、子ども達は１日目にお互い様子を見合う感じで、２日目でやっと自分の色が出てきて、仲良くしたりケンカしたりして、テンションも上がり、３日目は名残惜しいという雰囲気の流れがありました。しかし震災から間もない時期は、外あそびを欲していたからか１日目からテンションが高くあそびにも貪欲で、２日目の夕方くらいには体力が尽きて、３日目は朝起きてこない、という流れでした。震災から２、３年は特にそんな動きが目立ったかなと思います。昨今はそんなこともなくなり、福島の純朴なこどもたちらしい体験活動に戻っているかなとは思います。参加するこどもの数は、増えてはきていますね。教育的関心が高い親御さんほど、こどもに自然体験をという想いはあると思います。そこはちゃんと送り出してくれているという認識もあります。

うちは私立や附属の子たちもよく来ますが、（遊び方は）ふたつに分かれているように見えますね。好奇心旺盛で自分であそびを生み出していく子たちと、やることひとつひとつに、ねぇ先生これやっていいの？と許可を求める、指示を仰いでくる子たち。もしかすると、教室でしっかりと座って前向きに授業に取り組むという点では、どちらも同じ特徴なのかもしれません。しかし、自然の中に行って何もない状況に置かれた時の適応能力や、自分自身の生きる力という意味では、両者は二極化していると思います。

**福島の自然体験活動の場は**

日常生活の中で、線量がどうこうという会話はもうあんまり出てこないです。今まさに育っているこどもたちの中で、ここは危ないとか外はダメなんだよという会話は、一時より圧倒的に減りましたね。幼稚園、保育園、小学校くらいの外あそびや野外体験含めて、普通にやっていると思います。ただ、学校や保育園は前年の活動を踏襲することが多いので、震災前まで行われていた長期的な野外での体験等は、一度やらない期間があったために、そのまま戻っていない可能性はあると思います。実際、郡山女子短期大の先生が調べた県内の保育園などへのアンケート調査によると、４割の園は、自然の豊かなところに行っている機会が、年に１回あるかないかくらいだそうです。県民の森の職員の方も、一部自治体からの利用学校が極端に減ってしまったと話していました。一旦やめてしまうと、経験値のある人やノウハウを知る人が限られてしまって、以前の姿には戻っていかないんじゃないかなということは思います。ただ、その前の記録や傾向（減少してきていたのか増加してきていたのか）がどうだったかが私もわからないので、あくまでも主観的な話ですが。一方、県内の修学旅行生は、会津とかには９割くらい戻っているらしいです。しかし裏磐梯のキャンプ場などはまだ全然戻っていないと聞いています。ただそれも放射線がこわいからというよりも、（上述した）一回変わってしまったから、という可能性が高い気がします。学校さんの宿泊学習などで市町村や県の運営する施設に行きたがらないという話も聞きますね。利用者が少ないために食堂が維持できないなんて話も。

**保護者の想い**

（最近は）こどもたちというより親御さんたちのほうが、おそらくいろんな想いを抱えながら子育てをされていると思っています。震災後５年目を過ぎたくらいの頃から、県内に住み続ける人たちは放射線のことについて触れるのに「疲れた」という声が多く聞かれました。（放射線のことを）忘れたりどうでもよくなったりしたわけじゃないんですけど、きっと「疲れた」が正直な感想なんだと思います。2012年から県内でずっと活動して私としても、365日そのことを考えなくてはならない時期があって。コロナに関する考え方も近いかもしれませんが、とても（時に極度ともいえるくらい）気にされる方と、驚くほど全く気にしない方といて、さらにその間に、ものすごい数の濃淡のある意見があるんですよね。子育てや自然体験の話をするたびに、相手の人はどこにその思いがあるのか、考え方はどうなのか。お互いに探り合いながら対話したり、相談しなければならない状況でした。だから「疲れた」という表現は、命にも関わる大切な話に適切かどうかはわからないんですけど、だんだんとしんどくなって、そういう会話がなされなくなった感じはあります。自然体験活動をやっている仲間たちも、自分たちが責任と想いを持って場を開いて、そこに来てくれる人たちに対して活動を提供するということだけで、精一杯ということが多くなってきたかなと思っています。疑問や葛藤を持ち続けるのに10年は長いですね。ただ、震災後に県内の（教育活動として）自然体験をやっているネットワークが生まれたので、そこで活動の基準を設けたり、各団体のスタッフ同士の研修を実施している面は、震災前よりも間違いなく良くなった点だと思いますね。

また、福島は震災の後に屋内あそび場が数多くできて、こちらを利用する方もいろいろな想いがあると思います。屋内あそび場は割には自由にあそべる環境がありますが、小学校中学年くらいになってくると、子ども達によっては物足りなくなります。その時に、このままじゃだめだから、自然体験とかアクティブなことをやらせてあげないといけないよねとなる方と、もうこのままじゃ施設の迷惑になるから家でもしっかりとあそべるものや機会をつくりましょうと、インターネットやゲームをすすめる方と。自分が最近実施している、自然保育や自然教育のお話会で会う保護者の皆さんは、こどもの屋内あそび場にももちろん行っていて、そしたら家庭の狭いところで子育てするよりも、屋内あそび場みたいな広いところの方が彼らは癇癪を起さないし、いいっていうことがわかった後に、でも手狭になったし大きくなったら小さい子と共存ができなくなるから、その先はやっぱり外あそびや自然体験だと思ったという方が多いですね。ですので、相談されるのは、自然体験のお話会なのに、（既存の）放課後児童クラブ（以下、学童）がどうにかならないかということだったりします。制度上の課題も大きいとは思うのですが、一人あたり1.65㎡以上という国が定めた基準を満たせば運営上はOKという状態。預かりのニーズが高いこともあって、割とどの学童も定員いっぱいという感じ。確か50人までが支援員2人体制なんですよね（要支援の子達がいたりするとこの限りではありません）。登録できる人数は50人で、想定としては「登録したすべての子達が毎日来ることはない」という理由からなんだと思います。実際そうなのかもしれませんが、もし来た場合には、いくら専門の支援員さんとはいえ、ふたりで50人の子ども達と向き合うなんて、できることは本当に限られてしまうと思うんです。

狭い空間に大人数が居れば、ケンカも起こるし、トラブルもあるし、そうすると親御さんが呼び出されたりして。でも支援員の方がふたり体制で大変なこともわかっているし、実際に家庭としては（預かってもらって）とても助かっているので何も言えない。みたいな。

自然の中や広い敷地で、アクティブにやらせてもらえる児童クラブも一部あるにはあるみたいですが、やはりそこは人気が集中して、応募しても抽選などになることが多くて落ちる人も多いんだそうです。でも（保護者の皆さんとしては）働きにでなきゃならないから、選り好みしてばかりもいられない。すると、学童のいわゆる待機児童はゼロになるので、より希望に沿ったところを拡充したいと要望が出たとしても、申請が通らないなんて話もあるみたいです。そういう現状って、実際に子育て真っ最中の方々に聞いてみないとわからないことでもあるんですが、実際に相談としてもらってもできることがあまりなくて心苦しいです。

**担い手の課題**

私が今35歳ですが、県内のこどもの自然体験活動をやっている人の一番若い世代は30前半くらいだと思います。ですので、後進を育てなくてはという想いもあります。上述したネットワーク所属の団体も、スタッフの数は２人とか３人とか。とても小規模でやっています。なかなか若い子を雇用して、ということを新しく考える、生業を考えることが難しい現状があります。教育の文脈で若い世代がきちんと食べられるように支援するためにはと考えると、ネットワークの会合では行政の力を借りていきたいよねという考えが出てくることもあります。

もう一方で、（教職関係を目指す）学生の中で、自然の中では教育ができないと思っている子も多いのかもしれません。他の地域のことはわかりませんが、福島で保育士になりたい学生さんの中では、自然の中で保育をすることが魅力的だとか必要だとか思う学生が減ってきていると聞きます。今目の前に放射能があって危険。ということ以前に、その学生の子達の震災当時（約10年前）を考えると、小学生高学年とか中学生。その子達自身が子どもの時に体験をしていないからということは、少しだけ関係あるのかもしれません。自分が体験してきていないことを、自分の子達に伝えたり、体験させたりということはなかなか難しい事だと思います。全国に数ある自然学校の方々は、最終的には「産業としての自然学校」はなくなっていってほしいという願いがあるものと思います。理想としては、保護者はもちろん、地域の方々などが自分たちの身の回りの子ども達と自然の中で遊んだり過ごしたりする日常や環境があって、それをサポートするのが自然学校。という形にしたい。しかしその理想まではまだ道のりが長そうです。

**福島のつながり**

福島県は、上述したネットワークが生まれたことで、震災後に自然体験の人たちが車座になって話ができたり、個でやっても難しい事柄について、保育の人たちともお話会をしたり、大学と民間が共に話を始めたりしています。震災以前までは、（聞くところによれば）個人では互いに知ってはいても、何か一緒にやるということはなかったそうです。（県の面積として）広いこともあるし、みんなそれぞれ活動に精いっぱいというところもあって、現在は活動の形が違う人たちとも集まっています。教育活動として自然体験をやっている団体は県内そもそも少ないですし、世代も近いのは２団体くらいかな。後はみなさん50～60代くらいになってきます。継続性を考えると、何か今のうちに打っておかなければならない手があるような気がして。今まで個でがんばって何とかして形にしてモデルケースにしようとがんばっていたんですが、モデルケースを作る前に時が過ぎていくので、まずは“ファンを作る”という方向性に動きを変えてきた、というところはありますね。

自然保育や自然教育のお話会を始めたことも、福島県に移住してきた方々が「福島に来たら自然の中で体験活動ができると思っていた」「（震災の印象があっても）今はある程度大丈夫になった」という認識の上で、自然体験ができる！と思っていたけど、来てみたらなかなか魅力的な教育現場がない、という課題を聞いたことがきっかけでもあります。そんな現状をどうにかしたいという思いが重なって、今は普及活動を続けていこうかなと思っているところです。

**これからの世代へ**

ここ数年の間にできた団体もちょっとはあるし、少しずつだけど、保護者の方たちや民間企業が体験の場を作りたいとか、プレーパークの場を作りたい、という人たちに出会ってきた感覚が、最近はありますね。それから、ここ５年くらい、大学生が企画をする、こどもたち向けのキャンプや保育園にお手伝いにいくという活動の中で、安全管理の研修とか企画の作り方の場面で伴走するコンサルタント的な活動もやっています。ただ、キャンプとか自然体験に参加したいという子は一定数いるけど、そこからそういう業界で働きたいという学生は、今まで数えるくらい。もっと不思議なことは、キャンプとか自然体験しに行く学生にわりと教育関連を専攻する子が少ない（笑）。私が個人的に出会っていないだけなのかもしれませんが他の専門分野の子たちの方が来ていたりして、経験して帰って、大手の証券会社とか銀行とかに就職する。

自分で語るのは恥ずかしいですが、自分も出身が教育学部で、（当時）学校の先生になる前に広い世界を見たいと思って、どんどん新しいものに出会って新しい人とつながりたいと思っていました。今も「驚き」と「発見」がテーマなのは変わらず、思い動き続けているのですが、今の（特に教育に携わりたいと願う）学生たちにも現実を見ることも大切ですが、それ以上に、どんな形でも志や気概を持ってもらいたいと思っています。どんな未来がやってくるのか予想して、生き抜く知識や技術を身に着けることも大切ですが、未来は自分たちの力で創り出すことができる、社会をより良い方向へ変えることができると子ども達に向き合いながら伝えていってほしいと思います。ときに大きな壁や無理だと思う局面や事実もある。ただ、だからこそ私達には頭で知る情報ではなく、（自然の中でのことに限らず）実際にその身で体験することが必要だと思います。インターネットで調べると、ほとんどの疑問や事柄の解に簡単にたどりつける現代。でも、答えがすぐ得られるということがいいわけじゃない。自分でやったことが本当にそうなのか、自分で確かめるまでわからないし、自分のものにはならない。そうしないといけないんだということに、いつどの歳で気が付くか。どの歳で気が付いてもそこが一番早いので、大人の方々とも子ども達とも、自然の中の実体験をやり続けなきゃならないというのが、僕らの使命だなと思っています。

大学でもご縁をいただいて少し授業をさせていただいていますが、今みんな見ているものは同じだと思っている節があるし、今みんな考えていることも同じだと思っている事もある。そして、みんなネットで調べれば答えが出てくると思っているけど、仮に結果が一緒だとしても、それぞれたどり着く過程が違うわけです。過程の中で気づいたり、発見することはひとりひとり違うし、かかる時間が違う事から学べることも違う。そこに気づいてもらいたいですね。でも、すぐ諦めちゃう子も多いんですけどね。（ネットに載っているから）すぐこれでいいと思って。

そんな学生たちに最後に伝えるんですけど、私たちは物心ついたときから、ずっと肩書を持って生きてきているんですよね。小学生、中学生、高校生…なんとか高校のなんとか…だからまた肩書がほしくなるんじゃないか。もしかすると肩書がないと不安で生きられないんじゃないかって。誰かに名乗ったり、紹介するときにわかりやすければわかりやすいほどいいから。でもそうすると、進路や夢を選ぶ時にちょっと本当の気持ちから目を背けちゃうことがあるかもしれないんです。

だから、私は肩書なんて自分でつければいいんだから、肩書で選ぶ必要なんてないって伝えます。本当に人生をかけてやりたいことはなんなのか。少し無責任に聞こえるかもしれませんけど。私は大切な人達にこそ、後悔しないで輝いていく道を歩んでほしい。そういった意味では、私は、教育、それから自然界というもの、人間界だけで生きるんじゃなくて、自然界というものをきちんと知って、生きるっていうことを伝えるっていう仕事を一生やれるし、やりたいと思えることに気づけたことがとっても幸せなことだとも思います。だからこそ、問い続けます。「きみは何者なんだ」って。

**◎福島県の「ホールアース自然学校福島校」の和田祐樹さんにお話を伺って**

**酒井真由子**

和田祐樹さんが話してくださった、福島県における東日本大震災後の自然体験活動の現状は、まるでコロナ禍の現在と未来を予測したような内容でした。

まず、和田さんの「3日間のキャンプ」の話から、私たちは多くを学べます。和田さんによると、「震災前の3日間のキャンプでは、子どもたちは初日に徐々に友達や自然環境と親しくなっていき、2日目で自分を出していくことで友達と仲良くなったり、けんかをしたりする。そして、3日目には子どもたちの間に名残惜しさがあった」とのこと。ここにはゆっくりとした、豊かな時間の流れを感じます。ところが「震災後は、子どもたちは初日からテンションが高くあそびに貪欲、2日目の夜には体力が尽きて、3日目の朝は起きてこない」と。

和田さんからこの話をお聞きした時、まず、私は「子どもは、自然の中であそぶことに飢えることがあるのだ」と少し切なくなりました。ただ、「子どもは、たとえそれまで自然の中であそんでいなかったとしても、自然の中に行くとあそぶのだな」と、少しほっとした気持ちにもなりました。だからといって、「子どもが自然体験する機会が少なくても良い」ということではありません。大人は、子どもが自然の中で遊ぶことに飢えるようなことのないようにしなければならないと思います。

だからこそ、和田さんは、震災後、自然体験活動の機会を得ている子どもが減っているのではないかと危惧しています。「『長期的な野外での体験』は、震災がきっかけで一度でもやらない期間が続くことで、そのままやらなくなってしまう可能性がある。野外での体験をやめてしまうことで、できる人や知る人が限られていき、以前の姿に戻っていないのでは」と。

ちょうど今、新型コロナウィルス感染症の拡大により、私たちは行動範囲や活動内容をぐっと狭めています。そのような中で、「コロナ収束後、私たちは面倒がらずに、積極的に他者と直接会うために出かけ、充実した直接体験をしていけるのだろうか。例えば、もう2年もやっていない大勢でのキャンプ、それから地域のお祭りなど、再開できるのだろうか」と不安になることがあります。ただ一方で、教育機関の方々から「コロナ禍をきっかけに、前例となっている行事などを見直している。必要でないものは潔くやめて、必要なものはカタチを変えたり、新しいことを始めたりしている」と明るい話を聞くこともあります。

和田さんの強いメッセージである「未来は自分たちの力で創り出すことができる、社会をより良い方向へ変えることができると子ども達に向き合いながら伝えていってほしい」ということを、まずは大人が体現すること、そして、大人が子どもに伝えていくことが、コロナ禍に大人である人たちの責任であると痛感しました。

聞き手　小林成親

まとめ　酒井真由子

編集　　清水冬音